

野田 九条通信

2010年3月号

No.52

「野田・九条の会」事務局

Tel 7122-0502

野田九条の会ホームページ
http://www17.ocn.ne.jp/~art.9/

お申し込みはお早めに

館山戦跡バスツアー迫る

3月28日の九条の会主催のバスツアーは、もう申し込まれましたか。

館山は東京湾要塞として重要な位置であり住民も巻き込まれた軍事上重要な地域だったということです。戦争が終わった後、そのまま放置されていたものを、県立安房南高校の教諭の調査と高校生との学習の積み重ねで多くのことが明らかに

なりました。これを受けて館山市も赤山地下壕跡を市の指定遺跡として整備し、地域全体を「歴史と文化を生かしたエコミュージアム」として市の目標像にまで発展させています。同じ千葉県に住んでいても、知らなかったことが多く、調べ

るほど興味深い内容が期待できます。(この通信2面およびチラシ参照)

九条への想い

毎日毎日テレビ、新聞は冬季オリンピックピックの話題で一色である。スポーツ新聞でもないのにトップニュースに持つてくる状態が連日続いている。

しかし、本当に国民の大半が興味を持ち応援しているのだろうか。このようなニュースの嵐に「もうたくさん、やめてよ」と感じているのは私

オリンピック報道に感じること

ただだろうか。この大騒ぎの裏で大切な報道が埋没されているのだろうと考えると空恐ろしい気がする。

ヒットラーがオリンピックをナシヨナリズムの高揚に利用したことは有名な話であるが「日本、日本」と叫ぶ今の姿はヒットラーの意図と合致

個人で行ったことがあるという方も、初めての方にもお勧めです。別紙申し込み書に記入し事務局まで。ファックスでも大丈夫です。

3月28日(日) 7時集合
野田市文化会館駐車場
(梅郷方面の方はJAちば 東葛梅郷店で乗車も可)
参加費 大人5,500円
高校生以下4,500円

しているのではないかと杞憂している。「九条の会」の活動はどれだけマスコミで取り上げてくれているだろうか、

反戦活動で多くの人が集まる集会もベタ記事としても扱わない状況である。このような報道姿勢にある種の意図を感じるの

山崎 坂口 秀雄

平和のための戦争展準備開始

今年で4回目になる野田市の平和のための戦争展開催に向けて、2月28日第1回実行委員会を開き活動を始めました。今年も8月上旬に中央公民館を中心に開催することと準備していくことになりました。「戦争の悲惨さを語り伝え、平和を守

る」ことの大切さを訴え、多くの市民とともに改めて戦争と平和について考える場を作ること」を目的に、趣旨に賛同する人なら個人でも団体でも実行委員になれます。今年

いつか来た道に進むためには大本営的な報道による洗脳が不可欠である。

大騒ぎの裏で報道の意図は何かと疑う目を失わないでニュースに接する必要があること

原稿募集

憲法や戦争、平和について400字程度で書いてみませんか。お待ちしております

今月の野田九条の会

署名活動 3月9日(火)
PM4時~5時 愛宕駅前
定例会 3月13日(土)
AM10時~12時
樺のホール4階研修室

次回実行委員会
3月21日(日) 10時~12時
樺のホール4階研修室

館山に戦争遺跡？

3月28日「戦跡を訪ねるバスの旅」にむけて



関東の春に先がけて、ポピーやストック、菜の花が咲き乱れる南の地、房総フラワーライン、マリンスポーツなど人気の観光スポット館山。一度は訪れた方が多いのではないのでしょうか。けれどもかつて館山は・・・？

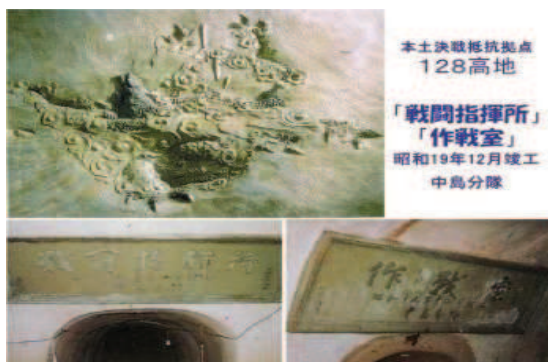
●館山は厳しい監視下の「要塞地帯」だった

東京湾要塞地帯にあった館山では日中戦争や太平洋戦争の激化とともに「軍都館山」と呼ばれるほどの拠点となっていた。なかでもアジア侵略や太平洋上への優攻訓練などにおいて特別な役割を担った。戦争末期には、館山海軍砲術学校から予備学生まで硫黄島など太平洋の島々に送り込まれたり、本土決戦のための特攻要員となり、多数の戦死者を出した。また「陸の空母」と呼ばれた館山航空基地では、東京大空襲にも匹敵する中国重慶への無差別都市攻撃「渡洋爆撃」がここを起点としてなされ中国市民に多大な犠牲を与えた。

ここに住む人びとは特別な法律のもとに置かれ日常生活も著しく制限された。とくに日米開戦以降は、住民監視が一段と敏感となり、写真や地図の検閲はもちろん、たとえば守房中学では校友会誌に掲載した一編の詩でさえ、内容が「防諜上好ましくらず」という理由で墨によって抹消されたり、東京湾側の列車の窓には鉄戸を下ろさせ、風景を眺めることを禁止し、乗客であっても厳しい監視のもとに置かれた。また守房中学の作業日誌にはうみほたるの光源の軍事利用のため、生徒たちがその採集に動員されたと記されている。

●「沖縄戦」に続く本土決戦の地に・・・

戦争末期の沖縄戦のなかで、守房地域はアメリカ軍上陸が想定され、国体護持や帝都防衛（松代大本営建設）のかけ声のもと、本土決戦体制が敷かれた。7万人近い陸海軍の部隊が配置され、さまざまな特攻基地が建設されていった。館山「かいた婦人の村」敷地内にある地下壕「128高地抵抗拠点」には、今も「作戦室」「戦闘指揮所」とのコンクリート製の額がある。当時19才だった兵士は「米軍の艦載機の空襲が繰り返し返されるなか、7月31日夜、中隊長から『諸君、敵の輸送船団が200数十隻東京湾に向かって侵攻しつつあり、我が中隊は海岸の水際において敵アメリカを撃滅すべし。諸君の命も今宵かきり・・・』と訓示をうける。海岸近くの松林を選び、枝を折って偽装して機関銃の陣地をつくり、中隊長の点検後に遺書を書くように命じられた」と証言している。住民たちもまた軍隊の盾になるよう仕向けられた「偽陣地」づくりに動員されていった。これは沖縄戦の教訓から、水際において米軍の艦砲射撃を「偽」陣地に集中させ、決戦部隊を温存させる作戦を考えていたからである。そのために住民を国民義勇隊部隊に組織し、「偽」陣地の「偽」兵士として投入する計画をもっていたという。さらに敵艦船への体当たり攻撃をする特攻艇「震洋」の基地では爆薬を装備し出撃体制をとっており、館山は第二の沖縄に向けた臨戦態勢のまま敗戦を迎えたのだった。



●米軍上陸と「直接軍政」



1945(昭和20)年9月2日、東京湾上の戦艦ミズーリ号において、降伏文書調印式が行われた。翌3日午前9時20分、カニンガム中将に率いられた米軍第8軍第11軍団の3500名は、上陸用舟艇を使って館山上陸してきた。上陸写真は「館空」水上班滑走台跡。日本側では占領軍の折衝窓口として、外務省館山終戦連絡委員会が設置された。上陸直後、軍人や市民たちの妨害を警戒した占領軍は、館山において「4日間」であるが、本土で唯一の「直接軍政」を敷いた。

赤山地下壕内に書き残された「USA」の朱文字は本土初上陸後、施設を接収した米兵によって書かれたものではないかと推察されている。アメリカの作家ノーマン・メイラー(1923~2007)は、終戦直後の進駐軍として館山上陸し、その後銚子に移動したと証言している。

(資料 NPO 法人安房文化遺産フォーラム HP を参照)